

# なごみ日和

京都発！ごみ減量情報誌

循環型の暮らし  
「アイトワ」

100年使える桐たんす  
「桐工房」

「なごみ日和」 / 海平和

持続可能なキャンパスを目指して  
「エコ〜るど京大」

食品ロスをゼロに  
「かんきょうと」

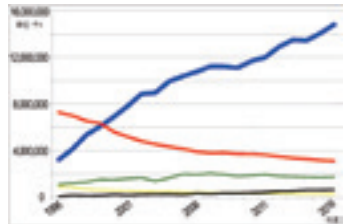
プラごみ廃棄大国「日本」

vol. **81**



表紙デザイン：嵯峨美術大学デザイン学科3年 乾志帆

ごみにまつわるこのグラフなあに？



答えは Web へ！

\* トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」

京都市ごみ減量推進会議

# 太陽の恵みの中で、 わたしらしく生きる

アイトワ代表 森 孝之さん

京都・嵯峨野。北に常寂光寺、南に小倉池を臨む一角に、美しく多種多様な緑に囲まれた「アイトワ」の森がある。小さな木の芽が大樹に育つ過程をつぶさに見つめ、60年以上の歳月をかけ、この森を育ててきたのは、森 孝之さんだ。全ての命が土に還る暮らしは、「ごみ」そのものを生み出さない。自然と人が調和し、太陽の恵みの中で暮らす幸せを、ご自身の人生を通して語りかけてくれた。



森 孝之さん

## 「アイトワ」へ込めた思い

「私は、19歳の頃からこの土地を耕し、木を植え、循環型の暮らしが成り立つように、様々な工夫を施してきました。当時、日本は高度成長期。週末ごとに土いじりをする私の生活は『時代に逆行している』と誰も相手にしなかった。でもね、自分は地球人の一人として、あらゆる生き物が幸せに暮らせる世界を目指そうと、本気でそうしようと決めました。この『アイトワ』は、自分の理想を具現化した、正に理想郷。『個人が幸せになることが、他の人の幸せに繋がる』と心の底から思っているんです」。

20代から40歳まで、商社マンとして主にファッション

ビジネスに携わり、一年の半分近くを国内・海外出張で飛び回る生活。だからこそ、世界が抱える問題を敏感に察知することができたと言う。大量生産・大量消費、欲望をそそる社会への漠たる不安だ。



趣きのあるアプローチの先に、人形工房と喫茶室があり、訪れる人をアイトワの世界に誘ってくれる

## 本当の「豊かさ」とは

人間は、動物としての「ヒト」と、理性や知性を持った「人」の部分に常に影響し合いながら、複雑な思考や行動をする生き物だ。古来より、自然の循環システムの中で生きてきた「ヒト」が、発達した脳が作り出した科学技術の



手作りのピザ釜と、庭の間伐材で作った薪ストーブ用の薪、そしてドライフラワーを作っている。薪風呂用の薪は他の場所4カ所で保存している。

恩恵によって、次第に自然循環に沿わない生活スタイルを求め、「豊かさ」だと考えるようになった。森さんは、この現状に警鐘を鳴らし続ける。

「本来は、自然循環しないモノを産み出し、市場化を図る時に、循環システムの確立と義務化を『人』として講じておかなければいけなかったのです。しかし、『ヒト』と『人』のアンバランスな関係が、その必要性を忘れさせました。石油資源の大量消費が、化学兵器の使用が、はたまたプラスチック製品の大量使用が環境に悪影響を及ぼすと分かって、慌てて手を打ち始める。この時点でしっかりと現実を認識し、地球環境に負荷をかけない方法を実行すれば良いものを、『人』が作り出した科学技術を信じるあまり、ごみ問題まで科学的に解決しようとしています。これでは、問題をより複雑化し、先送りさせかねません。その挙句の果てが、今日の世の中です」。

自然の循環システムに反する価値観や美意識が刷り込まれた社会、落ち葉のじゅうたんを楽しむどころか、落ち葉を「ごみ」だと認識する人が増えた社会にしてしまったのです。

## 自然といかに共存するか

「私は、そんな社会とは反対の住空間と生き方を、アイトワでは追求してきたようなところがあります。アイトワ

の畑の畝には、黒いビニールシートではなく、様々な作物のクズが被せられています。これは、追肥を兼ねた自然循環型のマルチング\*。蝶々を捕る捕虫網、これは虫害対策です。黒いビニールシート、化学肥料、そして農業などを

組み合わせた農作風景と、このアイトワの農作風景のいずれを好ましく思うか、美意識や価値観の問題も関わってきます」。

アイトワの畑の一角には落ち葉が集められ、それらは微生物によって分解され、良質な腐葉土となる。腐葉土は、再び大地に活力を与え、植物の、そして人間の糧となる。腐葉土の中には、カブトムシの幼虫が住まい、四季折々、花の蜜を求めて昆虫や鳥たちがやって来ては、その生を謳歌する。自然の循環システムの中には、しかし当然、人間にとって危険なスズメバチやマムシもいる。時に大怪我や

失敗を繰り返しながら、人間も自然の循環システムの一員であることを再認識する。



作物のクズのマルチングと捕虫網

## 今こそ、「人」の解放を

「生き物たちと共存しながら、手先が器用な人は物を創り、作詩が好きな人は詩を書き、作曲をする人、庭の手入れが得意な人、人それぞれが固有の潜在能力を大いに発揮し、刺激し合う。こんなコミュニティを形成できれば、みなが幸せに、豊かに暮らせます」。「人」の解放です。

大量生産・大量消費社会の概念にとらわれず、日々の太

陽の恵みの範囲内で暮らす。森さんの考え方に共鳴し、それぞれの地域で豊かに暮らす人たちがいる。自己完結能力を磨き、多様な生き方を認め合う、創造的で能動的な、手のぬくもりを大事にし合う暮らしだ。相互扶助も欠かせない。

「自分だけに都合の良い暮らしは、かえってごみを増やします。穏やかに、信頼し合って生きる。本当に幸せだと思っていると、他の人たちに負担をかけてまで生きたいとは思わなくなりますよ」。そう言って、森さんは微笑む。

## 逆転の発想が世界を救う

あるアメリカのエネルギーの専門家は、『日本は、自然エネルギーがとても豊かな国』だとうらやむ。太陽は燦々と降り注ぎ、風力、地熱、どれをとっても素晴らしい条件。これからは、太陽エネルギーの活用が中心となる時代。これまで日本は『地下資源の乏しい国』としてエネルギーの大部分を輸入に頼ってきたが、自然エネルギーを地産地消する方向に舵を切れば状況は一変する。

「日本はモノ作りにおいて、世界から注目されています。

一方で、経済力を振りかざし、特に近隣国から嫌われてきた歴史もある。日本が再び信頼を勝ち得るには、お金の力に頼らず、技術支援をはじめ、他の人に手を差し伸べる優しさを「誇り」にできるかどうかです」。

自分の暮らしを、人任せにしない。生活の営みを取り戻す。そうすると、たくさんの「なぜ？」に気が付くはずだ。思い迷ったら、自然の営みに心を傾けてみてほしい。そこには、幾つものヒントがあり、あなたを本当の幸せへと導いてくれるのだから。

「ごみ」を漢字で表すと『塵芥』（「じんかい」とも読む）。「塵」は、古くから大きさの単位としても使われており、1の10億分の1のこと。つまり「ほとんど存在しない」という意。ちなみに、最小単位である1の100億分の1を示す単位は、「埃」。

\*マルチング…植物の株元を覆うことで、土の温度や湿度を調節したり、雑草や害虫などの発生を抑える効果がある。主に、ポリエチレンフィルムや木製チップ、クルミの殻、ワラ、腐葉土など、素材や効果は様々。

## 人形工房&カフェテラス「アイトワ」

1986年、人形作家である妻 小夜子さんの人形工房が完成し、喫茶室併設を機に、庭全体を「アイトワ」と名付け、一般公開している。「アイトワ」には、自然循環型社会における「愛とは?」「愛と環」「愛永遠」について問い直すきっかけになれば、との願いが込められている。

住所：京都市右京区嵯峨小倉山山本町1 TEL：075-881-5521  
営業時間：10:00～17:00 定休日：火曜日  
(6月20日～7月20日、12月25日～12月31日、1月20日～2月20日はお休み)



松村香代子（2019年6月10日取材）



## 学生さんたちの 創造力で多彩な 環境活動を展開

### エコ〜ると京大

「持続可能なキャンパス」の実現を目指して、多様な視点から環境問題について考え、また、地域社会と連携しながら様々な事業を行っている学生団体がある。その名は、「エコ〜ると京大」（以下、エコ〜ると）。エコ×世界（ワールド）からの造語で、Écoleとはフランス語で学校を意味し、京大の中でエコを学ぶ学校という意味も含まれる。京都大学の学生、浅利美鈴先生（同大学 地球環境学堂 准教授）、浅利研究室の面々が中心となり、同大学環境科学センターに事務局を置き、学内外の関係者に支えられ活動を行う。2013年発足以来、「エコ〜ると」は多彩な事業を実施してきた。ここでは、特徴的な活動を紹介しよう。

#### 環境関連の先生方が連日登場 多彩なメニューで「初夏の陣」

木々が輝く5月。環境月間の6月に先立ち、エコ〜るとは2014年から「初夏の陣」と銘打って、環境について研究する京大の教授陣が日替わりで出向く「オープンラボ」を開催した。今年も浅利先生をはじめ、野中鉄也先生（同大学 大学院 工学研究科 助教）らの協力を得て開催され、参加者からは「直接、先生と接し、学ぶことのできる貴重な機会となり良かった」などの感想が寄せられた。

その他「世界に一つのマイバッグを！」などの企画も環境市民団体の協力で実施。脱プラ企画として開催した「木工教室」では、ごみ箱ラック、すのこタイプの木の棚などを、専門家の協力を得て、参加者自身が作り上げ、体験を通してプラの代替を目指した。

新入生入学の時期に実施し好評を得たプラとの「縁木り神社」をオープンラボでも実施し、新入生を対象に「京都大学一合柎」をプレゼントした。柎は、米を計る古来の優れた計量器。木に親しみながらプラスチックとの「縁切り」を狙う事業となった。



プラに替わる容器として一合柎を作った



「京都大学一合柎」を手につくエコ〜ると京大の上田知弥さん（工学部2年生）



木工教室の様子

#### 持続可能な社会を目指して SDGsをテーマにビッグな催し

6月27日午前10時、京都大学百周年時計台記念館には、環境に関与する専門家、事業者、行政関係者など、そうそうたるメンバーが集った。2015年国際連合が目標に掲げたSDGsにかかるシンポジウム「資源・エネルギー問題と持続可能性」という催しの幕が開いた。末吉竹二郎氏（気候変動イニシアティブ 代表 呼びかけ人/WWFジャパン代表）をはじめ、環境につ



「資源・エネルギー問題と持続可能性」シンポジウム

いては、一家言を持つ面々が登壇し、それぞれの考えを発表した。コーディネーター役を務めた酒井伸一先生（同大学 環境科学センター長）はパートナーシップによる取組の大切さを強調し、今後の動きの方向性を示唆した。午前中のシンポジウムに続き、午後は地方創生など、5テーマに分かれた小分科会で意見交換。締めくくりに、「超SDGs道場」なる一コマを設けた。多彩なプログラムでSDGsに取り組んだ1日。環境活動への弾みとなるだろう。



エコ〜ると京大メンバーが主催している「超SDGs道場」

#### 着物は大切な伝統文化 「Kistory」活動で次世代へ

「Kistory」って何？と思われる方のために説明しておこう。「Kistory」は京都着物企画という学生団体と共催している事業名で「Kimono」+「History」の造語。日本伝統着物文化の継承を目指すイベントである。着物は、着る人の人生「History」を物語る。それぞれのエピソードが息づいている着物が、着物を必要とする人の元へと渡る。2017年に始まったこの企画は、ダンスに眠っている着物の募集から始まり、参加者への着付け練習などを経て、12月下旬に贈呈式という形で、着物の受け渡しを行う。2017年は100着ほど集まったという。昨年12月の贈呈式では、最後に、



「Kistory」を共催する京都着物企画の佐野樹さん（左）久島博彰さん（右）



Kistoryワークショップの様子

外国人学生の代表者が感謝の手紙を読み上げ、寄贈者に手渡すとき流暢な英語でスピーチがあった。そして締めくくりには「ARIGATOU GOZAIMASU」の一言が…。感謝の気持ちを託したこの言葉の優しさが全員に伝わり、心温まる場面となった。「Kistory」は2019年も、京都着物企画の佐野樹さんたちを中心に企画進行中だ。

#### いつでもフリマ。「四方よし」 ごみゼロ事業を実践

廃棄物処理を研究されてきた浅利先生の指導のもとに、エコ〜るとは、「捨てればごみ、使えば資源」という理念を実践してきた。

使わなくなったものを、捨てるのではなく、まずリユースすることを優先。家庭で不要となった物の無償回収および販売も行っている。「初夏の陣」でフリーマーケットを開き、新生活のスタートを応援するほか、吉田キャンパス物理系校舎7階東の一室に、家具や雑貨、文房具、衣類などを集めて常設。「いつでもフリマ」というショップ形式で必要な時に来店し、要るものを持ち帰ることができるよう計らっている。収益金は、災害の義援金などに充てられ、2016年初夏の陣では、5万円を京都大学の窓口を通じて熊本へ。今年度も

20,484円の寄付を予定している。持ち込む人の不要品処理の悩みを解消し、また学生生活の支援ともなるフリーマーケット。さらに、自然環境の保全及び社会貢献ともなり、まさに「四方よし」を実現している。



生活用品がずらりと並び。初夏の陣でも出展。

#### 若者の活気と古い町が融合する 鯖江ツアーで日本文化を学ぶ

外国人留学生の中で人気の高いイベントといえば、「鯖江ツアー」。毎夏・毎冬、学生たちが鯖江市を訪問学習する。日本の中小都市での生活体験を通して、現代日本に存在する深刻な社会問題について考察を重ねる。さらに、鯖江市に継承される漆器などに触れ、日本文化の精髓を学ぶ。若者たちの活



餅まきにも参加

気と古き良きものとの融合が街の魅力を醸し出す鯖江。2日間の合宿形式による鯖江ツアーの意義は計り知れない。



漆器作り体験

楽しそうで、興味をそそられる事業が目白押し。学生ならではの伸びやかな発想を具現化する実行力に圧倒される。浅利先生をはじめ、指導陣の後押しも好影響なのであろう。「環

境活動」というと、とかく理論が先行しがちだが、しなやかな姿勢に伸びゆく樹木のような生命力を感じた。環境問題解決の未来を見つけた。

## 廃棄プラスチック問題にどう向き合うか ーリーフ茶を味わうという選択ー

近年、世界のプラスチック生産量は急激に増大し、廃棄プラスチックによる環境汚染が大きな問題として報道されている。日本は1人当たりのプラスチックの廃棄量がアメリカに次いで多い国だ。京都市民は、1人当たり年間約220枚<sup>\*1</sup>ものレジ袋、180本<sup>\*2</sup>ものペットボトルを消費している。このような問題に対し「リーフ茶を味わう」という、いかにも“京都らしい”観点から取り組んでいるのが本紙を発行している「京都市ごみ減量推進会議」（以下、ごみ減）である。

※1※2 ごみネット出典 <http://kyoto-kogomi.net/projects/plastic/>

### 3つの大変！

今回取材に応じたのはごみ減事務局の堀孝弘氏。堀氏は自治体の環境経済部次長他、環境系NPOの事務局長を歴任。京都大学環境保全センターの職員、京都市内のいくつかの大学で講師



堀 孝弘 氏

を務める等、多彩な経歴をもつ。同氏は廃棄プラスチック問題が世間で騒がれる以前から、この問題に着目し警鐘を鳴らし続けてきた。堀氏によると、廃棄プラスチック問題については「3つの大変」があるという。

一つ目の大変は、「海ごみが大変」。廃棄プラスチックによる海洋生物への影響のことである。堀氏は現状を訴える。「クジラの体内から重さ6キログラムのプラスチックごみが見つかる等、海鳥やウミガメ、魚がプラスチックを誤飲する状況が続いています。東京農工大学の調査によると、80%のイワシの消化管からプラスチック片が検出されたのです。」さらに、「巨大なごみの島が太平洋に浮かんでいて、その大きさは日本の国土のなんと数倍。そして、そのごみの大半はプラスチックなんです。」

二つ目の大変は“中国ショック”。2017年7月、中国政府が海外からの廃棄プラスチックの輸入を禁止すると発表した。「日本のリサイクル処理としての廃棄プラスチックのメインの輸出先が中国でした。中国に輸出ができなくなった今、行き場を失った日本の廃棄プラスチックはどこに行

くのでしょうか。このままだと、さらなる環境への悪影響が懸念されます。」

三つ目の大変は“脱プラ”。フランス、イギリス等の欧米諸国のみならず、台湾、韓国等のアジア地域にもレジ袋の有料化や禁止が始まっている。「世界は脱プラに向けて進んでいるのに、プラごみ廃棄大国の日本は遅れをとりつつある！」堀氏は力強く語った。

### リーフ茶を味わうという選択

廃棄プラスチックの中でも圧倒的に多いのが清涼飲料等のペットボトル。この廃棄ペットボトル問題について、リーフ茶を味わうことで解決のきっかけの一つになりたいと言う。「近年の清涼飲料の消費の中で特に多いのがミネラルウォーターと緑茶飲料なんです。水も緑茶も、ペットボトルでなければ入手できないというものではないですよ。」さらに、「緑茶は、日本の文化として根付いたもの。そして、茶産業は重要な京都の地場産業じゃないですか。」と熱く語った。

### 1本のペットボトルから

大学で講義をしていると、「お茶を淹れる」ことを知らない学生がいるという。それだけ、世の中がペットボトルの利便性に頼ってきたということだろう。そして最後にこう語った。「お茶を淹れることだけが、廃棄プラスチック問題を解決する方法ではありません。でも、現在問題になっている大量の廃棄ペットボトルだって1本1本が積み重なったもの。だから、お茶を淹れることで目の前のペットボトルをまずは1本減らすことが大事なんじゃないかな。」

リーフ茶の普及で、ペットボトルを減らそうキャンペーン <https://kyoto-leaftea.net/>

高野拓樹（2019年6月9日取材）

なごみ  
日和



KBS 京都 アナウンサー  
うみひら なごみ  
海平 和

### ●● 第23回 「早狩実紀選手の走り続ける理由」 ●●

第103回日本陸上競技選手権大会。男子100mの桐生祥秀選手やサニブラウン・ハキーム選手など注目が集まりました。そんな日本選手権の最年長選手は、京都出身 早狩実紀さん。46才の早狩選手は女子3000m障害の日本記録保持者で、北京五輪にも出場。現在はアメリカに拠点を置いて競技を続けておられますが、帰国時には私の担当するスポーツ番組「京スポ」コメンテーターとして出演して頂いています。

今回、27回目の日本選手権出場となった早狩選手に番組内で話を伺うことができました。早狩選手は一昨年まで26年連続出場、ただ去年は出場を逃し、2年ぶりの日本選手権の舞台でした。結果は予選グループ最下位で決勝進出はならなかったもの

の、早狩選手への声援や拍手にわいた会場内。この舞台にかえってこられたことが嬉しく、緊張と共に特別な思いもこみ上げたと話してくれました。去年出場を逃したときは1年後のこの日のことも考えられなかったそうです。「ただ1日1日できることを、自分の内側の声をききながら一生懸命やっていく中で、目標が見えてきて努力することが幸せだった、何回走っても同じ景色は絶対ない。だからやめられないんです」と話す笑顔を見ると、少しだけ早狩選手が走り続ける理由を感じられた気がしました。

可能性は無限だからと断言される早狩選手はこれからも新しい景色を見続けていかれるのでしょうか。私も日々、ベストを尽くし、可能性を信じて、今日も生きていきたいなと思います。



海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」「newsフェイス」、ラジオ「桐木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

## 人と物と。 織りなす「もっぺん」物語



第 10 回

### 桐工房

防湿性、防水性、防虫性、難燃性に優れ、着物や貴重品の収納・保管に最適な家具として知られる桐たんす。婚礼家具として両親から娘へと贈られることも多く、大切に使われてきた。昭和30年代、お年玉年賀はがきの特等商品に選ばれたと聞けば、当時かには高価で、庶民の憧れの品であったか想像できるだろう。

北山杉で有名な北区北部の山間地域にある「桐工房」の作業場を訪ねた。ここでは工房主が一人で腕を揮い、桐たんすの修理・再生を行っている。「桐たんすは古くなったら削って再生できる一生もの」と主。祖母や母の嫁入り道具だった桐たんすを受け継いで使いたいと修理に出されるケースが多いという。

再生作業は、金具を外しお湯洗い→割れ・欠け等の補修→カンナで表面を削る→トノコを塗る（表面処理）→ウズクリ作業（美しい木目を出す）→磨き仕上げ→金具を取り付けて完成。新品同様に美しく優美な姿に甦る。「昔のままでは使いづらいと、現代の暮らしに合わせたチェストなどにリフォームを希望される方もある」と話す。



磨き仕上げをする工房主



再生前（左）と後。現代の暮らしにマッチしたサイズにリフォーム

現在76歳の主は、桐たんす一筋に生きてきた職人…かと思いきや、実は、長年、呉服業界に携わってきた御仁。着物収納に最適な桐たんすの優秀さを顧客に説くうちに、もっと多くの人に使ってほしいと思うようになり、50代で華麗なる転身を遂げた。「両親に高いお金をかけて用意してもらった桐たんすを使わないで眠らせてはもったいない。きれいに甦らせ、親の想いまで継いで、長く愛用してもらえたら嬉しい」。3回削り直して100年は使えるという桐たんす。再生修理によってその寿命を最大限に活かしたいものだ。

▶ 桐工房 京都市北区等持院東町49-48 ☎ 075-464-6103 / 090-8217-0688（携帯）

藤原幸子（2019年6月1日取材）

## 余った食品を地域で循環、学生たちの挑戦！

まだ食べられるのに、そのまま捨てられてしまう食品を「0」にしたい。そんな思いから、2018年、龍谷大学政策学部 深尾ゼミナールの学生たちが「かんきょうと」を立ち上げ、家庭で余っている食品を地域で循環させる仕組み作りに取り組んでいます。食品ロスの削減を目指し、真正面から現状と向き合う「かんきょうと」の皆さんに、今後の展望や課題についてお話を伺いました。

### もったいないスーパー、開店！

6月22日（土）、京阪藤森駅近くの龍谷大学町家キャンパスにて、7回目となる「kyo 0 market\*（きょうゼロマーケット）」が開催されました。家に置いていても食わずに捨ててしまう賞味期限切れ前の食品を寄付で集め、それらを地域の人々に無償で提供し循環させる「もったいないスーパー」をはじめ、食品ロスを減らすためのアイデアを楽しく学ぶことができるイベントです。



深草支所での啓発活動

6月14日には伏見区役所深草支所・深草エコまちステーションの協力の下、深草支所1階にて案内ちらしの配布と食品回収が、同18日には町家キャンパスにて食品回収が行われました。事前に集まった食品は、全部で148品。イベント当日の持ち込みも合わせると154品にもなりました。この日の来場者は約70人、終日親子連れで賑わいました。

### 食品ロス、現状にショック

そもそも、なぜ食品ロスの問題に取り組むことになったのか。それは、2016年（ゼミとして最初に行った年）に長岡京市にある食品リサイクル施設を見学した際、コンテナいっぱい詰められた「食品ごみ」を見て、大きな衝撃を受けたからだといいます。「食品ごみ」をなくしたい、この現状を何とかしたい。そう考えた学生たちが「かんきょうと」を立ち上げ、全国の食品ロス削減の先進事例に刺激され「もったいないスーパー」開設が実現しました。

「『かんきょうと』の活動目的は、食品ロスに関心がなかった人にも家に帰ってから行動してもらうことです」とリーダーの工藤雅美さん。現在は主に深草地域で活動していますが、今後は京都市内の他の地域でも食品ロス削減を訴える活動ができれば、と意気込みます。

▶龍谷大学政策学部 深尾ゼミナール 京都市伏見区深草塚本町67



深尾ゼミナールの仲間たちと

### 自分たちで考え、行動する

深尾ゼミナールの活動方針は「現場で本物に出会う」こと。イベントが近付くと、話し合いや準備のため「かんきょうと」の活動は多忙を極めますが、「自分のやりたいことをやっているの、しんどいと思ったことはないです」と吉田和志さん。

「かんきょうと」の活動が注目されるにつれ、食品の回収日時や回収場所の問い合わせがくることも。「活動が認知されることはとても嬉しいですが、『もったいないスーパー』はいつも開催しているわけではないので、食品の回収方法や寄付を呼び掛ける地域など、継続していくための課題はたくさんあります」と梶原大誠さん。課題解決に向け、メンバー同士、知恵を絞ります。

活動を通して、メンバーの意識も変わりました。「私は飲食店でアルバイトをしていますが、『かんきょうと』に入るまでは食べ残しが多い状況を『これが普通だ』と思っていました。しかし、今では本当にもったいないと感じ心苦しいです」と古市真歩さん。

これ以上、食品を「ごみ」にしないために、人々の意識をどう変えられるのか。「かんきょうと」の粘り強い活動は続きます。

※kyo 0 market… 京都の地から、今日から食品ロスを減らすためにできることを発信したい！という熱い思いが込められている。



「持ち帰った食べ物は、全部食べてね」子ども達にも伝えます

これまで合計7回開催の全7回分の合計数値  
食品数：1208品 エネルギー：317,114kcal 総重量：197kg

松村香代子（2019年6月22日取材）